

原 著

King, I. M. の目標達成理論検証に向けた理論的枠組みの構築

— 患者との相互行為における看護婦・士の目標達成度と満足度の関連に焦点を当てて —

亀 岡 智 美 (千葉大学看護学部)

定 廣 和香子 (千葉大学看護学部)

舟 島 なをみ (千葉大学看護学部)

本研究の目的は、King, I. M. の目標達成理論の命題「看護婦・士—患者相互行為において目標が達成されるならば、両者の間に満足感が得られる」を検証するための理論的枠組みの構築である。文献学的方法を用い、理論に関する文献、目標達成理論に関する文献等を対象に、看護学の知識体系における目標達成理論の位置づけ、検証の現状と課題等を検討した。その結果、次のことが明らかになった。1. 目標達成理論は、看護学の知識の構造的階層の中に理論として位置づくものであり、その範囲からみると中範囲理論に分類される。2. 目標達成理論は、多様な看護学領域における研究や実践に活用可能であり、未検証命題を中心とする経験的検証の累積は、その活用促進となる。3. Theoretical Substruction を適用することにより、精度の高い理論的枠組みを構築できる。考察においてはこれらの結果を統合し、理論的枠組みを構築した。

KEY WORDS : King's Theory of Goal Attainment, theoretical framework, goal attainment, satisfaction

I. 緒 言

King, I. M. の目標達成理論¹⁾は、目標達成をめざす看護婦・士と患者の人間的な相互行為の過程に焦点を当てた看護理論である。千葉大学看護学部看護教育学教育研究分野における研究の多くは、研究の基盤となる用語の概念規定や理論的枠組みに同理論を採用している²⁾。筆者等は、それら看護教育学研究の基盤強化に向け、1995年以後、目標達成理論の検証に取り組んできた³⁾。本研究はその一環であり、看護婦・士を対象とする研究による同理論の命題「看護婦・士—患者相互行為において目標が達成されるならば、両者の間に満足感が得られる」を検証するための理論的枠組み構築をめざす。看護婦・士を対象とするこの命題の検証は、患者との相互行為における目標達成度が高く、満足度も高い看護婦・士養成のための基礎資料としても看護教育学的に重要である。理論的枠組み⁴⁾は、看護学の知識体系における研究の位置づけを明確にするとともに、研究が論理的に展開されるよう方向づける。また、精度の高い理論的枠組みの構築は、研究の確実な遂行に貢献する。

II. 研究目的

目標達成理論の命題「看護婦・士—患者相互行為にお

いて目標が達成されるならば、両者の間に満足感が得られる」(以下、命題 A) の検証に向けて、精度の高い理論的枠組みを構築する。

III. 研究方法

本研究は、文献学的方法⁵⁾を用い次のように実施した。

①理論に関する文献⁶⁾の精読による理論の定義・種類・看護学の知識体系における位置づけの検討を通し、看護学の知識体系における目標達成理論の位置づけと特徴を明らかにした。②理論検証に関する文献⁶⁾の精読による理論検証の定義・方法の検討を通し、目標達成理論の特徴に合致した検証方法を明らかにした。③目標達成理論に関する文献⁶⁾を理論検証という視点から分析し、目標達成理論に関する検証の現状と課題を明らかにした。④③の成果に基づきさらに文献⁶⁾を検討し、命題 A の検証に使用可能な測定用具を明らかにした。⑤①から④の結果を命題 A の検証という観点から考察し、その内容を統合することにより理論的枠組みを構築した。

なお、これら一連の過程においては、各文献の記述内容を正確に解釈し、妥当性を確保した結果を導き出すために、本研究と同様に文献学的方法を用いて研究の理論的枠組みを構築した先行研究⁷⁾を参考にするとともに、King, I. M. の目標達成理論に精通した研究者によるスーパービジョンを受けた。

受理 : 平成12年 6 月14日 Accepted : June. 14. 2000.

IV. 結 果

1. 看護学の知識体系における目標達成理論の位置づけと特徴

看護学における理論に関する文献を検討した結果、様々な研究者が、理論に関し、定義、範囲からみた種類、看護学の知識体系における位置づけに言及していた。

Chinn, P. L. 等^{8) 9)}, Meleis, A. I.¹⁰⁾, Fawcett, J. 等¹¹⁾ は、理論に関する既存の定義を、焦点、内容の限定の程度といった観点から検討し、各々新たな定義を提示した。また、Diers, D.¹²⁾ は、研究における「問い」と「答え」という視点から理論をとらえ、定義を示した。各定義は、理論を現象に対する系統的な見方を示すものとしている点に共通性がある一方、「現象を記述、説明、予測、コントロールする機能を持つ」、「概念、定義、概念間の関連を述べる命題から構成される」、「抽象的で仮定的なものである」、「研究という知的創造の過程を経て生み出される」等、強調する側面が各々異なっていた。また、各定義は排他的でなく、いずれも他の研究者から承認されていた。

以上は、理論が、その目的、構成要素、抽象性、仮定性、機能、構築過程に着目し、「現象への体系的な見方を提示する目的をもって、研究という人間の知的創造の過程を通して産み出されるものであり、抽象的かつ仮定的な相互に関連する一連の概念、定義、命題から構成される。また、その機能は、現象を記述、説明、予測、コントロールすることである」と定義できることを示す。

また、理論は、それが対象とする範囲により、大理論、中範囲理論といった種類に分類される¹³⁾。大理論は、最も広い範囲を包含する理論であり、比較的抽象度が高く操作的定義を持たない非特定の概念と、直接的、経験的検証が困難な命題から成る。中範囲理論は、大理論よりも範囲が狭く特定の限られた数の概念、及び、現実世界に対する限定的な見方を示し直接的・経験的に検証可能な命題から成る。

さらに、理論は、メタパラダイム、哲学、概念枠組み、経験的指標等とともに、看護学の知識を体系づける構成要素^{9) 10) 14)} の1つに位置づけられる。これらの内メタパラダイム、概念枠組み、理論は、いずれも概念と命題から構成され、各々の違いはその抽象度に基づく。Fawcett, J.¹⁵⁾ は、それに着目して各構成要素間の関係を図式化し、知識の構造的階層と命名した。Fawcett, J. によると、看護学の理論は、メタパラダイム概念である人間、環境、健康、看護に関し、理論家が持つ哲学を反映して構築された概念枠組みから導き出されたものであり、特定の具体的な現象に焦点を当てた概念と命題から成る

ものとして知識の構造的階層に位置づけられる。

目標達成理論は、人間、環境、健康、看護に対する理論家 King, I. M. の哲学を反映した概念枠組みより導き出されており、9つの主要概念と8つの命題から成る。その構築過程においては、様々な学問分野における研究成果が統合された。目標達成理論は、看護婦・士と患者の相互行為における目標達成という特定の現象に焦点を当て、それらに対する体系的な見方を提示している。これは、目標達成理論が、看護学の知識の構造的階層の中に「理論」として確実に位置づけ、その範囲からみると中範囲理論に分類されることを示す。

2. 目標達成理論の特徴に合致した検証方法

1) 理論検証の定義と方法

理論検証に関する文献によると、看護学における理論検証の重要性は1950年代¹⁰⁾ より強調されていたが、その定義、方法に対する考え方は1986年のSilva, M. C. の論文¹⁵⁾ を契機に発展した。この論文は、経験的検証と呼ばれる方法を用いた研究を理論検証研究とする考え方を示し、他の研究者^{10) 13) 16)} から支持を得ると同時に、理論検証への関心を高め、定義、方法に関する検討^{17) 18) 19)} を促進した。

また、Silva, M. C. はその後も理論検証の定義と方法を問い続け、1992年、再び論文²⁰⁾ を発表した。これは、1986年の自身の論文を看護学における理論検証の定義の明確化に貢献したと価値づける一方、経験的検証を唯一の検証方法としたことへの限界を指摘した。また、理論検証を「理論が主張、経験するとしているものが実際にそうであるか、学術や実践における重要な問題を解決するかどうかを証明する過程である」と定義し、その方法として①経験的検証、②批評的推論に基づく検証、③看護実践への活用に基づく検証、④個人的体験の記述に基づく検証、の4種類を提示した。この定義と方法は他の研究者^{10) 13)} に受け入れられ、中でも、Fawcett, J.¹⁵⁾ は、その著書においてSilva, M. C. の考え方をさらに整理、発展させた。

Fawcett, J.¹⁵⁾ によると、4種類の理論検証方法のうち、経験的検証は、測定用具を用いて理論を構成する概念を測定し、得られた実際のデータを用い、理論における主張の正しさを量的・演繹的に確認する方法である。これは、中範囲理論を直接検証する最適な方法とされる。その過程においては概念と適切に関連する測定用具の選択が重要であり、そのためには、Theoretical Substruction^{4) 21) 22) 23) 24)} の実施が有効である。この方法は、研究における主要概念の認識・分離、概念間の関係の陳述、抽象度による概念の階層的系列化とその関係の図式化に

より、研究における理論的要素(理論の概念)と操作的要素(測定用具、経験的指標)の間の整合性、論理性検討を可能にする。

批評的推論に基づく検証は、実際のデータを用いることなく、知的活動を通して理論を記述、分析、批評し、理論の長所や限界を解説する方法であり、あらゆる種類の理論に適用できる。

実践への活用に基づく検証は、理論が実践における問題解決や質向上に役立つことを確認するため、理論を実践に意図的に活用し、その結果を評価する方法である。これは全ての種類の理論に用いるが、特に、中範囲理論に効果的である。

個人的体験の記述に基づく検証もまた実際のデータを用いる方法であるが、質的・帰納的方法論を用いる点で経験的検証と異なる。具体的には、大理論が包含する現象に関する個人的体験を記述し、大理論の哲学的基盤に立脚した質的・帰納的方法論に基づく分析を行い、データと大理論の概念、命題の一致を検討する。この方法は、大理論の直接的検証に有効とされる。

以上は、4種類の理論検証の方法の内、中範囲理論の検証には特に前三者が有効であることを示す。従って、先述の通り目標達成理論は中範囲理論であり、その検証には、経験的検証、批評的推論に基づく検証、実践への活用に基づく検証の3種類を用いることが有効である。

3. 目標達成理論に関する検証の現状と課題

目標達成理論が発表された1981年から1998年までの期間における同理論に関する文献を検索した結果、国内外の文献122件を収集できた。これら122件の内容を理論検証という視点から分析した結果、3件が経験的検証、43件が批評的推論に基づく検証、24件が実践への活用に基づく検証であり、残る52件は、理論検証ではなく、研究の基盤として目標達成理論を活用したものであった。

経験的検証である3件²⁶⁾の検討結果は、目標達成理論の8命題中3命題が実際のデータによって検証されており、命題Aを含む5命題は未検証であることを示した。

批評的推論に基づく検証である43件²⁶⁾の検討結果は、目標達成理論が、目標達成を導く看護婦・士-患者相互行為に関する実際的知識を提供し、研究、実践、教育に活用できる理論である一方、論理演繹的に構築された同理論の活用を促進するために、未検証命題を中心とする経験的検証の累積を課題とすることを示した。

実践への活用に基づく検証である24件²⁷⁾の検討結果は、目標達成理論が、多様な看護状況における看護婦・士-患者相互行為を目標達成に導く指針として、病院における看護実践の基盤として、また看護基礎教育及び継続教

育において活用できることを示した。

研究の基盤として目標達成理論を活用していた52件²⁸⁾の検討結果は、目標達成理論が様々な看護学領域の研究の基盤として用いられていることを示した。また、その中には、命題Aが焦点を当てる看護婦・士-患者相互行為における目標達成と満足感に関し、概念分析による概念の属性解明²⁹⁾、及び、前者に関する測定用具開発³⁰⁾を試みた先行研究が存在することを示した。

4. 命題検証に使用可能な測定用具

前項の結果は、目標達成理論が、批評的推論に基づく検証、実践への活用に基づく検証を用いて広く研究されていることを示す一方、量的・演繹的研究である経験的検証の累積を重要な課題としていることを明らかにした。そこで、命題Aの経験的検証に向けて、患者との相互行為における看護婦・士の目標達成度と満足度各々に関する測定用具を検討した。

1) 患者との相互行為における看護婦・士の目標達成度に関する測定用具

前述した通り経験的検証においては、概念と適切に関連する測定用具を選択する必要がある。第3項の結果は、看護婦・士-患者相互行為における目標達成に関する概念の属性解明²⁹⁾、及び、測定用具開発³⁰⁾を試みた研究が存在することを示した。前者は、看護婦・士-患者相互行為における目標達成の経験的指標となる測定用具が、①専門的知識・技能・態度を駆使した看護過程展開、②開放的で適切なコミュニケーション維持と知覚の一致促進、③相互行為への患者の積極的参加促進、④医療従事者との相互行為における役割遂行、⑤組織人としての役割遂行の5側面から、看護婦・士の行動の適切性を測定するという要件を備えている必要性を示した。また、後者は、その要件を満たす信頼性・妥当性を確保した測定用具として、「看護婦・士目標達成行動尺度 (Scale of Nurse's Performance for Goal Attainment: NPGA)」を開発していた。従って、NPGAは、看護婦・士-患者相互行為における目標達成度に関する測定用具として採用できる。

2) 患者との相互行為における看護婦・士の満足度に関する測定用具

第3項に示した通り、看護婦・士-患者相互行為における満足感に関し、概念の属性解明を試みた研究²⁹⁾が存在した。この研究は、経験的指標となる測定用具が、「看護婦・士-患者相互行為における出来事と個々人の価値観が合致する程度を測定できる」という要件を満たす必要性を示した。しかし、この要件に合致する測定用具開発は試みられていない。そこで、要件に合致する既

存の測定用具検討に向け、患者との相互行為が看護婦・士の仕事における中心的役割であることを踏まえ、看護婦・士の仕事に対する満足度に関する文献を検索した。

1993年から1998年までの5年間を対象とし、看護婦・士の仕事に対する満足度に関する国内外の文献を検索した結果、測定用具を用いて看護婦・士の仕事に対する満足度を調査した研究は80件であった。また、その測定用具には、心理学・社会学といった他学問領域において多様な職業に就いている人々を対象に開発されたもの³¹⁾、及び、看護学領域において対象を看護婦・士に限定して開発されたものがあり、後者は、Index of Work Satisfaction³²⁾ (IWS) あるいはその日本語版³³⁾ (IWS日本語版)、McCloskey/Muller Satisfaction Scale³⁴⁾ (MMSS) あるいはその日本語版 (MMSS日本語版)³⁵⁾、Nursing Work Index (NWI)³⁶⁾、Nursing Job Satisfaction Scale³⁷⁾ (NJSS)、Work Satisfaction Scale³⁸⁾ (WSS) の5種類であった。その内、IWS、MMSS、NWI、WSSが給料、職業的地位、同僚との相互行為、組織の方針等、患者との相互行為以外の多様な要素を含めて看護婦・士の仕事に対する満足度を測定するのに対し、NJSSは、専門職としての実践を基盤に生じる看護婦・士の満足度を組織に所属することから生じる満足度と区別して測定するという特徴を持っていた。すなわち、NJSSは、看護の目標達成を目指して患者との相互行為を重ねるという看護婦・士の仕事における中心的役割に対する満足度を測定する尺度であった。また、その測定概念である専門職的/職業的職務満足は、看護婦・士が、患者との相互行為において提供している看護の質、看護提供に関わる時間、患者との相互行為を中心的役割とする現在立場における全体的な喜びに対しどのように考えているかを意味すると規定されていた。これは、NJSSが、自分と患者との相互行為を中心とすることが看護婦・士の価値観に照らしてどのようであるかを測定するものであることを表す。従って、NJSSは、看護婦・士-患者相互行為における満足度の測定用具として使用できる。

V. 考 察

本研究の結果、次のことが明らかになった。①理論は、現象への体系的な見方の提示を目的とし、研究という人間の知的創造過程を通して産み出されるものであり、抽象的かつ仮定的な相互に関連する一連の概念、定義、命題から構成される。また、その機能は、現象の記述、説明、予測、コントロールである。②目標達成理論は、看護学における知識の構造的階層の中に理論として位置づき、その範囲からみると中範囲理論に分類される。③理

論検証は、理論が主張、経験するとしているものが実際にそうであるか、学術や実践における重要な問題を解決するかどうかを証明する過程である。④目標達成理論は、多様な看護学領域における研究や実践に活用可能であり、その活用促進に向け、特に命題Aを含む未検証命題を中心とする経験的検証の累積が必要である。

これらは、目標達成理論検証の一環として命題Aの経験的検証を実施することが、看護教育学研究の基盤強化及び患者との相互行為における目標達成度が高く、満足度も高い看護婦・士養成の基礎資料となるという意義に加え、多様な看護学領域における目標達成理論の活用促進という意義を持つことを示す。

また、本研究の結果は、経験的検証を行う際、概念と適切に関連する測定用具の選択が重要であり、そのためには、研究における主要概念の認識・分離、概念間の関係の陳述、抽象度による概念の階層的系列化と変数間の関係の図式化によるTheoretical Substructionの適用が有効であることを明らかにした。同時に、概念分析の結果に基づき命題Aが焦点を当てる看護婦・士-患者相互行為における目標達成と満足感各々に関する測定用具の要件が明らかになっており、その要件を満たす測定用具も存在することを明らかにした。これらは、Theoretical Substructionを適用し、命題Aが焦点を当てる概念に関する概念分析の結果とその結果が導いた測定用具を統合することにより、命題Aの経験的検証に向けた精度の高い理論的枠組みが構築可能性が高いことを示唆する。

以上は、次のような理論的枠組みが、看護婦・士を対象とする命題Aの経験的検証を導くことを示す(図1)。①命題A「看護婦・士-患者相互行為において目標が達成されるならば、両者の間に満足感が得られる」から「看護婦・士-患者相互行為における目標達成」と「看護婦・士-患者相互行為における満足感」の2つの概念を認識・分離できる。②この2つの概念の関係は、看護婦・士に焦点を当て、「患者との相互行為において、目標達成度が高い看護婦・士は、それが低い看護婦・士よりも満足度が高い」と陳述でき、この陳述は、命題Aを検証する研究における仮説となる。③②の陳述は、「患者との相互行為における看護婦・士の目標達成度」と「患者との相互行為における看護婦・士の満足度」の2つの概念から成る。④概念分析の結果に基づき、各概念に関する測定用具は次の要件を満たす必要がある。すなわち、「患者との相互行為における看護婦・士の目標達成度」の経験的指標となる測定用具は、看護婦・士行動の適切性を、①専門的知識・技能・態度を駆使した看

護過程の展開, ②開放的で適切なコミュニケーション維持と知覚の一致促進, ③相互行為への患者の積極的参加促進, ④医療従事者との相互行為における役割遂行, ⑤組織人としての役割遂行の5側面から測定できる必要がある。また、「患者との相互行為における看護婦・士の満足度」の経験的指標となる測定用具は、患者との相互行為の状況が、看護婦・士の価値観に照らし合わせた場合どのようなかを測定できる必要がある。⑥「患者との相互行為における看護婦・士の目標達成度」は、経験的指標となる要件を備えたNPGAを用いて測定できる。⑦「患者との相互行為における看護婦・士の満足度」は、その経験的指標となる特性を備えたNJSSを用いて測定できる。⑧「患者との相互行為における看護婦・士の満足度」は、その経験的指標となる特性を備えたNJSSを用いて測定できる。⑨看護婦・士を対象とする調査を実施し、NPGA得点とNJSS得点の相関関係を検討することは仮説の検証となり、それにより仮説を導いた命題Aの経験的妥当性の検討が可能となる。⑩その成果は、「看護教育学研究の基盤を強化する」、「患者との相互行為における目標達成度が高く、満足度も高い看護婦・士養成の基礎資料を提示する」、「多様な看護学領域における目標達成理論の活用を促進する」ことに貢献する。

VI. 結 論

1. 目標達成理論は、看護学の知識の構造的階層の中に理論として位置づき、その範囲からみると中範囲理論に分類される。
2. 目標達成理論は、多様な看護学領域における研究や実践に活用可能であり、その検証には経験的検証、批評的推論に基づく検証、実践への活用に基づく検証の3種類の方法が有効である。また、活用促進に向け、特に未検証命題を中心とする経験的検証の累積が必要である。
3. 目標達成理論検証の一環としての命題Aの経験的検証は、看護教育学研究の基盤強化及び患者との相互行為における目標達成度が高く、満足度も高い看護婦・士養成の基礎資料となるという意義に加え、多様な看護学領域における目標達成理論の活用促進という意義を持つ。
4. Theoretical Substructionを適用し、命題Aが焦点を当てる概念に関する概念分析の結果及びその結果が導いた測定用具を統合することにより、命題Aの経験的検証に向けた精度の高い理論的枠組みを構築できる。
5. 1から4に基づき、命題Aの経験的検証のための理論的枠組みが構築された(図1)。

本論文は、千葉大学大学院看護学研究科における博士学位論文の一部である。また、公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金より助成を受けた。

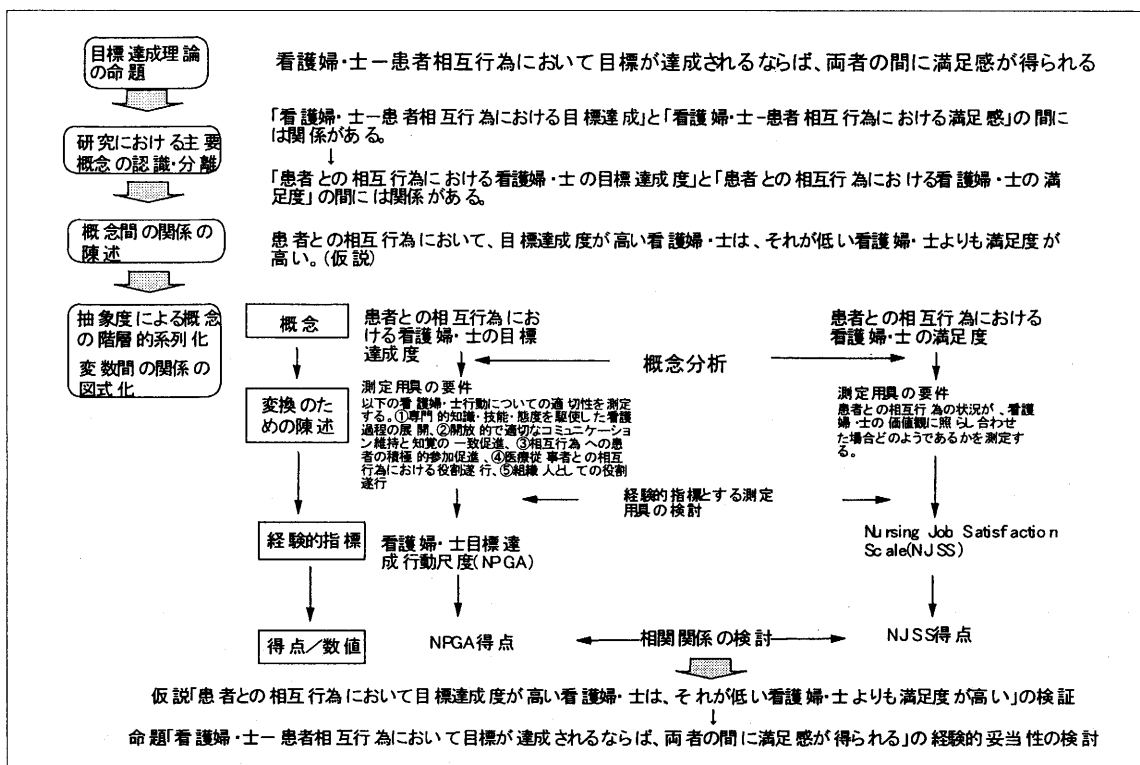


図1 Theoretical Substructionに基づく目標達成理論の命題検証を導く理論的枠組み

〈引用文献〉

- 1) King, I. M. : A Theory for Nursing, Systems, Concepts, Process, 141-161, Delmar Publishers Inc., 1981. ; 杉森みど里訳 : キング看護理論, 医学書院, 175-200, 1997.
- 2) 舟島なをみ : キング看護理論と看護教育学, *Quality Nursing*, 4(11), 8-12, 1998.
- 3) 例えば次の研究がある. 亀岡智美他 : キング看護理論の検証-看護婦(士)の役割葛藤とストレスの関連に焦点を当てて-, *千葉看護学会会誌*, 3(2), 17-24, 1997.
- 4) Burns, N. & Grove, S. K. : The Practice of Nursing Research, Conduct, Critique, & Utilization, W. B. SAUNDERS COMPANY, 1997.
- 5) 下中邦彦編 : 世界大百科事典 27, 平凡社, 333, 1981.
- 6) 結果の中に引用文献として提示した。
- 7) 舟島なをみ・杉森みど里 : 看護教育学における質的帰納的研究方法論開発研究のための理論的枠組みの構築, *千葉看護学会会誌*, 3(1), 8-14, 1997.
- 8) Chinn, P. L. & Jacobs, M. K. : Theory and Nursing : A Systematic Approach, C. V. Mosby, 70, 1987.
- 9) Chinn, P. L. & Kramer, M. K. : Theory and Nursing : A Systematic Approach, C. V. Mosby, 72, 1991.
- 10) Meleis, A. I. : Theoretical Nursing : Development and Progress, Lippincott, 12-14, 1997.
- 11) Fawcett, J. & Downs, F. S. : The Relationship of Theory and Research, F. A. DAVIS COMPANY, 1-2, 1992.
- 12) Diers, D. : Research in Nursing Practice, J. B. Lippincott Company, 31-60, 1979. ; 小島通代他訳 : 看護研究-ケアの場で行うための方法論, 日本看護協会出版会, 53-102, 1988.
- 13) Fawcett, J. : Analysis and Evaluation of Nursing Theories, F. A. DAVIS COMPANY, 1993.
- 14) Fawcett, J. & King, I. M (Eds.) : The Language of Nursing Theory and Metatheory, Sigma Theta Tau International Center Nursing Press, 1997.
- 15) Silva, M. C. : Research Testing Nursing Theory : State of the Art, *Advances in Nursing Science*, 9(1), 1-11, 1986.
- 16) Walker, L. O. & Avant, K. C. : Strategies for Theory Construction in Nursing, East Norwalk, CT : Appleton & Lange, 1995.
- 17) Moody, L. E., Wilson, M. E., & et al. : Analysis of a Decade of Nursing Practice Research : 1977-1986, *Nursing Research*, 37(6), 374-379, 1988.
- 18) Sharon, A., Duldt, B. W., & Brown, S. : Research testing theory : a selective review of Orem's self-care theory, 1986-1991, *Journal of Advanced Nursing*, 18, 1626-1631, 1993.
- 19) Acton, G. J., Irvin, B. L & Hopkins, B. A. : Theory-testing research : building the science, *Advances in Nursing Science*, 14, 51-61, 1991.
- 20) Silva, M. C. & Sorell, J. M. : Testing of nursing theory, Critique and philosophical expansion, *Advances in Nursing Science*, 14(4), 12-23, 1992.
- 21) Dulock, H. L. & Holzmer, W. L. : Substruction : Improving the link-age from theory to method, *Nursing Science Quarterly*, 83-87, 1991.
- 22) Hinshaw, A. S. : Theoretical Substruction : An assessment process, *Western Journal of Nursing Research*, 1(4), 319-324, 1979.
- 23) McQuiston, C. M. & Campbell, J. C. : Theoretical Substruction : A Guide for Theory Testing Research, *Nursing Science Quarterly*, 10(3), 117-123, 1996.
- 24) Gibbs, J. : Sociological theory construction, Hinsdale, IL : Dryden, 1972.
- 25) 次の文献他全3件である. Hanna, K. M. : Use of King's Theory of Goal attainment to Promote Adolescent's Health Behavior. In. Frey, M. A. & Sieloff, C. L. (Eds.) : *Advancing King's Systems Framework and Theory of Nursing*, Sage Publications, 239-250, 1995.
- 26) 次の文献他全43件である. 舟島なをみ : キングの目標達成理論, *看護 MOOK*, 35, 56-62, 1990.
- 27) 次の文献他全24件である. Smith, M. C. : King's Theory in Practice, *Nursing Science Quarterly*, 1(4), 145-146, 1988.
- 28) 次の文献他全52件である. 定廣和香子 : 看護場面における看護婦(士)行動に関する研究, 千葉大学大学院看護学研究科, 平成8年度博士論文, 1997.
- 29) 亀岡智美・舟島なをみ・杉森みど里 : 「看護婦(士)-患者相互行為における目標達成」と「看護婦(士)-患者相互行為における満足感」に関する概念分析-キング目標達成理論の検証に向けて-, *看護教育学研究*, 9(1), 15-25, 2000.

- 30) 亀岡智美他：「看護婦（士）－患者相互行為における目標達成」に関する測定用具の開発－キング目標達成理論の検証に向けて－，千葉看護学会誌，5(1)，1－7，1999.
- 31) 例えば次の文献に紹介されている. Stefanik, R. L., Cassandra, K. & et al. : Perceptions of Nursing Staff Development : A Replication Study, *Journal of Nursing Staff Development*, 10(3), 115－119, 1994.
- 32) Stamps, P.L., & et al. : Nurses and Work Satisfaction : An Index for Measurement, Health Administration Press Perspective, 1986.
- 33) 尾崎フサ子他：看護婦の職務満足質問紙の研究－Stampsらの質問紙の日本での応用，大阪府立看護短大紀要，10(1)，17－24，1988.
- 34) Muller, C.W. & McCloskey, J.C. : Nurses' Job Satisfaction : A Proposed Measure, *Nursing Research*, 39(2), 113－117, 1990.
- 35) 志自岐康子：日本語版 McCloskey and Mueller Satisfaction Scale (JMSS) の妥当性と信頼性の検討，東京都立医療技術短期大学紀要，10，126－128，1997.
- 36) Kramer, M. & Hafner, L.P. : Shared Values : Impact on Staff Nurse Job Satisfaction and Perceived Productivity, *Nursing Research*, 38(3), 172－177, 1989.
- 37) Atwood, J.R. & Hinshaw, A.S. : Anticipated Turnover Among Nursing Staff, D.H.H.S. RO1 NU00908, 1986.
- 38) Hinshaw, A.S. & Atwood, J.R. : Anticipated Turnover among Nursing Staff, D.H.H.S. RO1 Nu00908, 1984.

THE CONSTRUCTION OF THEORETICAL FRAMEWORK FOR TESTING
THE KING'S THEORY OF GOAL ATTAINMENT : FOCUSED ON THE RELATIONSHIP
BETWEEN THE DEGREE OF GOAL ATTAINMENT AND THAT OF
SATISFACTION OF NURSES IN INTERACTIONS WITH PATIENTS.

Tomomi Kameoka*, Wakako Sadahiro*, Naomi Funashima*

*Department of Nursing Education, School of Nursing, Chiba University

KEY WORDS :

King's Theory of Goal Attainment, theoretical framework, goal attainment, satisfaction

The purpose of this research was to construct theoretical framework for testing one of the propositions of King's Theory of Goal Attainment of which focus was on the relationship between goal attainment and satisfaction in nurse-patient interactions. Philological method was used to construct the theoretical framework. The analysis of the literature of theory, King's Theory of Goal Attainment, and so on identified the followings. 1. The Theory of Goal Attainment is one of the theory in structural hierarchy of nursing knowledge and a middle range theory. 2. The Goal Attainment Theory contribute to varied area of nursing research and practice, and accumulation of empirical testing of the theory is needed for progressing the use of it more. 3. empirical testing of the proposition of the Goal Attainment Theory contributes for the use of it in various area of nursing. 4. precise theoretical framework will be constructed by applying theoretical substruction. The theoretical framework was constructed out of these findings.